

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02660

研究課題名(和文) 認知物語論および可能世界論の統合の場としての物語更新理論の可能性の探求

研究課題名(英文) Toward an Integrated Theory of Narrative Renewal Based on Cognitive Narratology and Possible Worlds Theory

研究代表者

片淵 悦久 (Katafuchi, Nobuhisa)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：30278147

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、先行する一連の共同研究課題において提案してきた「物語更新理論」を検証し、認知物語論、可能世界論、エナクティブ理論等、物語論に関連する諸研究分野の最新動向をふまえ、受容と創造が継続的に繰り返す物語経験のプロセスにおける物語の変容を「更新」と再定義した。また物語の受容者/創造者が物語経験の過程で物語の「世界」の全体像である「ストーリーワールド」を(再)概念化し、「メンタル・イメージ」として記憶/呼び出すことで物語の変換に関与していること、さらには物語経験の繰り返しが異なるストーリーワールドどうしの融合や共有を促し、これが「物語のマトリクス」の統合的形成につながることを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の研究成果の学術的意義は、物語の経験が人類に普遍的な文化的現象であること、また物語の受容者は同時に創造者でもあり、物語の記憶とその呼び出しがストーリーワールドの変換という形で生じる「更新」にほかならないことを解明した点に求められる。社会的意義については、更新がアダプテーションやリメイクに限らずさまざまな形で出会う広範囲な物語の作り変えの現象であり、社会に生きる私たちが日々物語更新を目にしているだけでなく、みずからまた物語経験の記憶とその呼び出しをつうじて物語更新に積極的に関与してきているという事実へ目を向け、物語更新をつうじた包括的な文化理解の重要性を示唆する点にある。

研究成果の概要(英文)：This joint research project has aimed at revising Narrative Renewal Theory. Narrative renewal is observable in every experience of a story, regardless of the form or medium of its manifestation. Each narrative has its storyworld that only the recipient/creator's mind conceives. Through a cognitive or enactivist construction of its mental image(s) that the recipient and the creator (re)conceive alike, the storyworld acquires the ontological status as its worldness in the decoding process. The storyworld derives from mental images that represent the narrative matrix, and one may (re)conceive and encode it into a renewed narrative discourse. In this recurring and continuous process, the narrative's recipient/creator collaborates with the matrix, an infinite sum of storyworlds that combine the potentially inexhaustible repetitions and differences, to construct his or her image of the storyworld.

研究分野：物語論

キーワード：物語更新 物語 ストーリーワールド アダプテーション 可能世界 認知 ナラトロジー

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、a)「アダプテーション理論にもとづいた 物語 のメディア横断性の研究」(挑戦的萌芽研究=平成 20~22 年度)、b)「アダプテーション理論を発展させたメディア横断的物語更新理論の構築」(基盤研究(C)=平成 23~25 年度)、および c)「メディア横断的物語更新理論を応用した現代表象文化の受容形態の解明」(基盤研究(C)=平成 26~28 年度)での研究成果を土台として、同一と認識可能な物語が多様なメディアやジャンルをつうじて作り直されるという現代の文化事象を解読し、物語の受容と創造が継続的に繰り返される人の物語経験のプロセスを解明する理論体系を、物語研究の立場から確立することをめざすべくその計画をスタートした。

これまでの3つの先行研究課題においては、実際に物語が作り直された事例を分析研究する実践的アプローチと同時に、このような事象を解読するための(主に海外発の)物語に関する各種理論の検証とその応用可能性について検討を重ねてきた。a)では、文学作品の映画化を主に扱った初期のアダプテーション(翻案)理論(adaptation theory)と、それを修正発展させた最新の理論的展開についての考察を深めた。とくに物語表現メディアの増加を反映した最近のアダプテーション理論の動向に注目し、翻案の過程に焦点をあてることで、アダプテーション作品を(再)創造された自立的な作品としてとらえる契機を見出し、従来優劣関係にみられがちであった翻案元テキストと翻案テキストとの対等な比較研究へ可能性を確認した。

b)では、翻案や作り変えにおいて変わらない基準点として措定可能な「物語」のありようを研究する最新理論の動向調査とその応用可能性を探った。物語論(narratology)、なかでも構造主義物語論以降の、たとえば関連する自然科学や社会科学のいくつかの研究分野、具体的には認知科学、メディア理論などを取り込んで多面的に発展を遂げてきた物語論(postclassical narratologyとも称される)を参照することで、既存のアダプテーション理論のみにとらわれない、さらには現代の物語論の関心とも接続可能な新たな文化研究的物語分析理論として、翻案的作り直しの現象を同じ「物語」が更新され発展的に存続するととらえる「物語更新理論」(narrative renewal theory)の仮説的提案につながった。

c)では、実際の翻案事例の分析を通して物語更新理論の基礎概念の検証と修正を行い、物語受容の仕組みとして「メンタル・イメージ」(mental images)の概念を取り入れることで、物語が翻案的な再創造の実践により更新される過程をあらわす基本構造モデルを考案した。構造モデル構築の過程で、作品やメディア、ジャンルの枠を超えて関連する物語テキストを統合する概念として、最新の物語論の概念のひとつであり、可能世界論に起源をもつ「ストーリーワールド」(storyworld)の有用性を学んだ。

このようにわれわれがこれまで積み重ねてきた研究成果は、現在活況を呈しているメディア・コンシャスな物語論の研究動向をふまえると、物語更新への関心が国際的な物語研究のそれと一致していることが確認される。また物語認知の多様性を包含可能なメンタル・イメージの概念を導入することにより、われわれの提案する構造モデルが「ストーリーワールド」の概念を補完し、物語更新に関連する事例をより包括的に扱うことが可能となると確信された。ただし、「ストーリーワールド」の概念については、可能世界論の枠組みだけでなく、認知論、もしくは現象学との関連の深いエナクティヴ理論(enactivism)の領域での研究動向をふまえた理論的修正が必要であることが確認された。そこで本研究課題では、物語更新の構造モデルを検証・改善していく上で、可能世界論、認知物語論およびエナクティヴ理論の見解も取り入れることで、現在の基本モデルを逸脱する変則事例にも対応可能な、さらなる理論的展開と実

実践的可能性の追求をめざすことになった。

## 2. 研究の目的

本研究課題では、メディア横断的な物語の作り変えを、メディア横断的かつメディア・コンシャスな「更新」ととらえるという観点からアプローチを試みる「物語更新理論」を提案し、その理論的発展性と実践可能を検討することを目標とした。具体的には、物語経験はさまざまな物語の受容と経験の継続的プロセスであること、すなわち物語経験とは物語更新にほかならない文化的現象であること、また物語更新の解明はメディアの変換を経た物語の再創造の原理やその形態の考察から分析可能であること、さらには更新された物語に関する受容や再創造のあり方などを考察することに焦点を絞ったうえで理論的土台を見直しつつ体系化を再考し、新たな物語論の可能性として再提案することを最終的な研究成果に定めることにした。

本研究課題においては、メディアやジャンルの枠を越え、同一の物語が形を変えて再生産されるという、現代表象文化において顕著な事象を解明するため、前掲の認知物語論 (cognitive narratology)、可能世界論 (possible worlds theory)、およびエナクティブ理論 (enactivist theory) という物語研究において注目される最新のアプローチを検証し、必要に応じてその知見を取り入れることで、物語更新を解明する理論の発展可能性を探った。そのうえで、メディアの変換を経て物語が再創造される原理やその形態、また更新された物語に関する受容のあり方などについて考察を深め、新たな物語論の実践過程を体系的に確立することをめざした。

## 3. 研究の方法

これまでの3つの共同研究において提案してきた物語更新理論を、アダプテーション理論と物語論を、認知物語論、可能世界論、エナクティブ理論の研究動向をふまえてアップデートし、見直した理論体系を考察の土台とし、物語更新にかかわる個々の事例研究に応用しながら、多様なメディアやジャンルをつうじて展開される物語更新の現象を観察することをつうじて理論の応用可能性を探る。なかでも物語内容面でのテーマの踏襲や変化、また物語表現にかかわる活字メディア、映像メディア、パフォーマンス・メディアなどの関与形態の変化、あるいは物語更新に付随する文化や言語の差異による変化、さらには物語更新が実践される時代や地域政治、経済的状況、物語更新の主体者のさまざまな属性(職業/国籍/宗教/男女/世代など)などを考慮し分析を進める。その結果から、物語更新のプロセスにみられる共通パターンを構造的に可視化させることをめざした。

## 4. 研究成果

平成 29 年度には、これまでも参照してきたアダプテーション研究、認知物語論、可能世界論、エナクティブ理論などの最新動向について目を配りながら、メディア横断的かつメディア・コンシャスな物語更新理論の見直しをはかり、独創的研究方法を展開するための具体的な方法を探った。とりわけ、物語更新の構造モデルの構築を用いた、複数のジャンルやメディアの物語テキストや批評書を取り上げ、それらについて検討を加えた。初年度の研究成果のうち特筆すべきものは、研究代表者片渕の著書『物語更新理論 実践編』(2018)である。これは、物語更新理論をはじめて研究の実践に応用し、英米文学の古典的作品の映画版にとどまらず、SF パロディ映画や、アニメやコミック作品などを取り上げた物語更新の事例研究である。その他、

片淵と研究分担者鴨川が参加したシンポジウム『アダプテーションの「境界」』(テキスト研究学会シンポジウム, 2017)、同じく片淵が参加したシンポジウム『アダプテーションの内と外』(日本英文学会関西支部シンポジウム, 2017)での研究発表についても、物語更新理論の実践可能性を関連研究分野以外の研究領域に研究成果として周知する役割を果たしたという点であげておきたい。

平成 30 年度は、研究対象の範囲を明確化することともに、対象となる物語テキストの物語更新にかかわる共通要素と相違点をあわせて見出すことを目標に、必要な先行研究等の資料の収集と分析を進めた。さらには、研究対象として選択した物語テキストを観察・分析し、それにもとづいた研究発表を行い、また研究論文の原稿を執筆した。物語更新プロセスの構造モデルの構想についても作業を開始した。当該年度の研究成果のうちもっとも重要なものは、片淵 (Katafuchi) の *Narrative Renewal Theory: A Brief Introduction* (2019) である。これは、片淵がこれまで本研究課題および先行する 3 つの研究課題をつうじて発表してきたシンポジウム原稿や講演原稿、および著書『物語更新論入門(改訂版)』(2017) および『物語更新理論 実践編』(2018) 等の内容を再考しつつ、英語で書き下ろした研究書である。その内容は、物語の定義から物語論の歴史と現在、物語更新の概念的説明を土台として、物語更新理論の実践までを解説する啓蒙的理論書となっている。その他当該年度の研究成果として、研究分担者小畑の『人間性の更新』(日本英文学会中四国支部第 71 回シンポジウム)における発表「融合と転生 SF 的異類婚姻譚と視覚映像文化の現在」をあげておきたい。

研究最終年度である平成 31 年(令和元年)度においては、過去 2 年間の研究の積み重ねから得られた成果の内容を総括し、メディア横断的かつメディア・コンシャスな物語論としてのおよび物語更新理論の新たな理論的展開の可能性について検討を重ねた。具体的には、物語更新理論を活用した作品分析からなる研究発表(研究分担者鴨川)、また物語更新理論についての講演と国際学会での英語研究発表(研究代表者片淵)があげられる。研究分担者鴨川は研究論文「未完のリチャード」(*Essays & Studies*, 2020)において、シェイクスピアの『リチャード三世』の多様な語り直しの変遷と物語更新のありように関して考察を展開させている。片淵 (Katafuchi) の研究発表 “Theorizing the Continuous Process of Narrative Renewal” (Hawaii University International Conferences, 2020) は、物語の受容と創造の継続的プロセスである更新のメカニズムを再考し、ストーリーワールドの代理表象としてのメンタル・イメージをトランスフィクショナル・ワールドネス (transfictional worldness=個々のストーリーワールドの超越・融合を促す「世界性」)と結びつけることで、より細密な理論化を提案する英語発表である。なおこの研究発表の原稿は当該学会の「プロシーディングス」ページにウェブ公開されている。

3 年間の研究成果全体をつうじて、物語更新という現象に、物語の受容と創造には「ストーリーワールド」の内的形成が重要な役割を果たすという知見が得られた。物語更新の過程において、こうしたストーリーワールドおよびそれを代理表象するメンタル・イメージの形成が果たす具体的役割については、さらなる研究の深化が求められる。これらについては今後さらに考察を加えていく予定である。

なお、研究代表者片淵が執筆中の英語論文(前掲プロシーディングス公開原稿の加筆修正版)は、現時点では最終的な完成には至っていないが、引き続き作業を継続し、最終的には物語更新理論の国際的訴求力を高めるために、物語論関連の国際専門学会誌 (*Narrative* 等) への投稿をめざしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鴨川 啓信	4. 巻 65
2. 論文標題 未完のリチャード 『リチャード三世』の多様な語り直しに関してだ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Essays & Studies	6. 最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 片淵 悦久
2. 発表標題 物語更新 理論と実践
3. 学会等名 静岡文化芸術大学特別講義（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nobuhisa Katafuchi
2. 発表標題 "Theorizing the Continuous Process of Narrative Renewal"
3. 学会等名 The 9th Annual Arts, Humanities, Social Sciences & Education Conference, Hawaii University International Conferences (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小畑 拓也
2. 発表標題 融合と転生--SF的異類婚姻譚と視覚映像文化の現在
3. 学会等名 日本英文学会中四国支部第71回大会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 片瀨 悦久
2. 発表標題 物語更新とは何か？
3. 学会等名 静岡文化芸術大学特別講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片瀨 悦久、鴨川 啓信
2. 発表標題 シンポジウム：アダプテーションの「境界」
3. 学会等名 テキスト研究学会第17回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 片瀨 悦久
2. 発表標題 シンポジウム：アダプテーションの内と外
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第12回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 片瀨 悦久
2. 発表標題 物語更新する文学、文学する物語更新
3. 学会等名 静岡文化芸術大学特別講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小畑 拓也
2. 発表標題 「分解 / 接続」された「女 / 男」：キャラクターの時空間とSF的想像力
3. 学会等名 尾道市立大学経済情報学部街中ゼミ特別企画
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Nobuhisa Katafuchi	4. 発行年 2019年
2. 出版社 BookWay	5. 総ページ数 90
3. 書名 Narrative Renewal Theory: A Brief Introduction	

1. 著者名 片淵 悦久	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学術研究出版 / ブックウェイ	5. 総ページ数 258
3. 書名 物語更新理論 実践編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鴨川 啓信  (Kamogawa Hi ronobu)  (60314788)	京都女子大学・文学部・教授    (34305)	

## 6. 研究組織(つづき)

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小畑 拓也 (Kobata Takuya)  (60364121)	尾道市立大学・芸術文化学部・准教授  (25405)	
研究分担者	GARLINGTON Ian (Garlington Ian)  (30757323)	関西外国語大学・外国語学部・助教  (34418)	削除：2017年9月20日
研究協力者	武田 雅史 (Takeda Masafumi)		